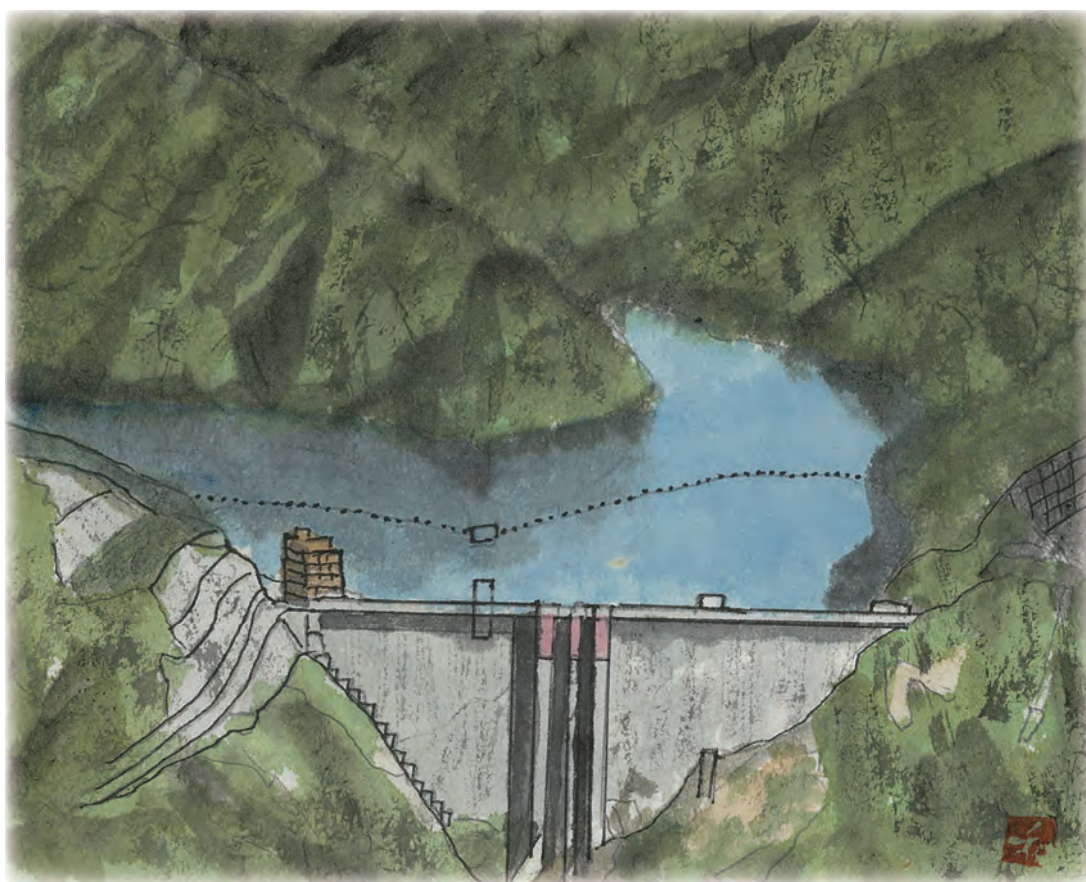


人々の笑顔があふれる「地域づくり」を応援する

地域づくりinほくりく

2017 SUMMER



「大石ダム」

北陸地方建設局のダム第一号は「大石ダム」である。
大石は山菜の宝庫である。天からの恵みを天恵物という。
大石ダムでは「天恵物保障」を行っている。

絵 土田 和男

◆ 第5回定時総会開催報告

2

◆ 随想

4

湯田 祥子(若松城天守閣郷土博物館学芸員)
人物で見る会津の心

◆ 特別企画

6

北陸「道の駅」最前線
北陸「道の駅」連絡会事務局

◆ シリーズ「次世代に向けた地域の魅力づくり」

10

‘おこひる’で伝えたい!先人の知恵、
おもてなしの心
YAMANBAガールズ(長野県大町市)

◆ 北陸再発見

12

江戸人の涼菓を平成につなぐ
「薄荷葛きり」(新潟県南魚沼市)

◆ 特集「地域とともに」

14

「ゆずある暮らし」づくり
～「国造ゆず」の地域ブランド化に向けて～
能美柚ゆうゆう倶楽部(石川県能美市)

◆ 会員だより

16

◆ 伝言板

20

第5回定時総会開催報告

去る6月15日、第5回定時総会がANAクラウンプラザホテル新潟において開催されました。



まず、出席会員数報告で、会員773名中、649名(委任状提出者391名含む)の出席が確認されました。新人会員は28名です。

続いて理事長挨拶がありました。

理事長挨拶

新たな50年に向けたスタートの年

(一社)北陸地域づくり協会は、前身である(社)北陸建設弘済会の設立から数えて50周年の区切りを昨年迎え、今年は新たな50年に向けた大事なスタートの年になります。

これまでの50年の歴史を振り返ってみますと、(社)北陸建設弘済会は公益法人として、建設行政の補完的な役割を果たすことによって、地域社会の公益増進に寄与することを目的に、当時の北陸地方建設局の退職者が設立趣意書に基づき昭和42年4月に設立しました。

その後、昭和48年のオイルショック以来、我が国の社会経済は高度成長から低成長、安定成長へと移行した中であって建設行政に対するニーズは多様化し、行政事務も複雑多岐に及んできました。この様な困難な情勢に対応し、求められるニーズに少しでも応えるため、建設行政の質的向上に寄与するための講演会、講習会事業、地域社会に密着した広報活動等に力を注ぎ、広報誌として多数の方の愛読いただいた「けんせつほくりく」「ほっとほくりく」の編集・出版にも取り組んできました。技術面に

おいては、北陸地方特有の課題である雪氷対策に関する調査研究や学識経験者等の参加による委員会設置など先導的役割を担ってきました。

また、会員の経験や技術力を活かした防災エキスパート制度が発足し、中越地震等の災害支援にボランティアとして参加して大きな成果を上げてきたことや、「北陸地域の活性化」に関する助成事業を創設して、地域における活性化のための研究や活動、並びに建設技術の開発を対象に支援を行なってきました。

これまでの多くの成果の一端をご紹介しましたが、これら多くは関係各位のご指導と会員のご支援の賜と厚く御礼申し上げます。

平成20年代に入り、平成20年12月に施行された公益法人制度改革により、平成25年4月1日付けで組織名称を、(社)北陸建設弘済会から(一社)北陸地域づくり協会に移行しました。



挨拶する大林 厚次理事長

一方、同時期に弘済会を取り巻く環境が、国土交通省の要請もあり組織全体が大きく変わらざるを得ない状況に一変しました。一つは道路特定財源問題から平成20年4月国土交通省の「道路関係業務の執行のあり方改革本部最終報告書」に基づき、業務執行のあり方について根本から見直しを求められ、当時の弘済会も組織や業務の大幅な見直しを行ったところでもあります。

その後、間髪入れずに新たな課題として、平成22年7月に北陸地方整備局長から「発注者支援業務等の調達に係る改革の方向につい

て」の要請があり、「発注者支援業務等からの計画的撤退及び不要資産の国庫納付」について対応しなければならなくなりました。まさに青天の霹靂でした。

発注者支援業務等からの撤退については、職員は勿論のこと多くの皆さんにご心配をかけ、同時に多くの方々のご協力により平成25年度から4ヶ年に分割し民間会社に逐次事業譲渡を行ない、平成28年度に無事終了したところであります。当然のことではありますが、業務量・体制共に当時の8～9割減の惨憺たる状況であり、経営環境は引き続き厳しい状況となっております。

今年度は折り返し50年の新たなスタートの年と位置づけ、山積する多くの問題・課題に新たな気持ちで取り組む決意であります。引続き会員の皆様のご支援・ご協力をお願いいたします。

■ 議事

次に、佐久間専務理事から平成28年度事業報告及び公益目的支出計画実施報告があり、第1号議案「平成28年度決算承認の件」が審議され、異議なく承認されました。



総会会場風景

■ 特別講演

◆講師 五代目 一龍齋 貞花氏(講談協会理事)

◆演題 「台湾に東洋一のダムを造った八田與一」

一龍齋氏は、金沢市出身の水利技術者、八田與一はった よいち技師が、日本統治時代の台湾で当時東洋一の規模の農水施設「烏山頭うさんとうダム」の設計から完成までの経緯を中心に講談されました。



五代目 一龍齋 貞花氏

台湾の農民のために大事業を施工できる喜びから、ダムの設計図を、一日30分の睡眠で6ヶ月かけ作成した。

ダムは、当時最新の技術、「セミ・ハイドロリック・フィル工法」でつくられた。大型機械を導入し、施工期間を短縮した。技術者を大事にしない国は滅びるとの持論から、技術者に機械操作を学ばせる目的もあった。

1920年(大正9年)着工したダムは、1930年(昭和5年)に竣工した。乾期には飲み水もなくなるほど干上がり、雨期には洪水になり農作物が育たなかった嘉南平野かなんが15万haの耕作地に生まれ変わった。

日本では、やっと教科書に八田與一が取り上げられるようになったばかりだが、東日本大地震で被災した時に、台湾から300万円の義援金が届いたのは、このダムをつくった八田への感謝の気持ちからだ。

その他、示唆に富んだお話しを伺いました。

- 会社経営は、志、情報、読み、部下、決断が鍵になる。会社とは何かを考え、情報過多の中、いかに価値ある情報をみつけるか。相手の考えていることを読み、それに応じた対応が必要。部下を適材適所に使う。引き際の決断が一番難しい。
- 安全の原点は、会社。社員にきちんと給料を与えること。給料が行き渡っている会社では、社員のミスが少ない。
- 事故をなくすには、全員が同じ気持ちで取り組むことが大事だ。
- 責任者が健康だとコミュニケーションがうまくいく。

人物でみる会津の心

ゆだ さちこ
湯田 祥子

若松城天守閣郷土博物館学芸員

会津若松市生まれ。富山大学人文学部卒業。平成17年より若松城天守閣郷土博物館勤務。同館学芸員として、館蔵資料の保存管理や展示の企画、それに関連する業務に携わる。平成27年度は、若松城天守閣再建50周年記念企画展「築城者 蒲生氏郷」展を担当したほか、今年度は、平成30年に迎える戊辰戦争から150年という節目を前に、秋にプレ展として「戊辰前夜」展を企画担当。

■ 会津人にとっての鶴ヶ城

鶴ヶ城、日本酒、お米、会津塗、会津木綿、陶磁器、絵ろうそく…。思いつく限りの「会津」に関連するキーワードを並べたが、この中でもどれか一つは目にされたことがあるだろうか。願わくば、大多数の方々のご存じであって欲しい。これらはどれも、筆者の生まれ育った会津のお国自慢アイテムの代表例である。さらに、鶴ヶ城に登ったことがある、という方がおられるとすれば、なお有難いことである。それは、会津に生まれ育った者にとっては誰しもが生活の一場面に鶴ヶ城が存在しているからであるし、大げさに言ってみれば鶴ヶ城は会津のシンボルだからである。

幼稚園・保育園・小学校・中学校・高校と、どの時代も必ずと言っていいほど一度は鶴ヶ城に訪れる。記念撮影も鶴ヶ城をバックに行われる。桜の時期には子供から大人まで地元のお花見客で大賑わいであるし、人生の大きな節目である結婚の際に鶴ヶ城で前撮りをされる人々がたくさんおられるなど、人生の様々な場面が鶴ヶ城と共にあるのである。そして筆者にとっては、どこにいるよりも長い時間を過ごしている職場でもある。

この「鶴ヶ城」だが、一口に言っても、天守閣の姿を思い出していただけのことはあっても、そこに秘められた長い歴史について興味を持っていただける人は残念ながらそれほど多くはないだろう。しかし、会津の歴史にかかわる仕事に就いている者として、ほんの少しでも会津の歴史に興味を持っていただければ幸いです。

るし、そこから現在の会津へ訪れていただくきっかけにつながれば、万々歳である。であるから、せっかくいただいた機会に、ほんの少しでもご紹介させていただきたい。

■ 会津藩「仕の掟」

さてそうはいつても、歴史と聞くだけで敬遠される方々や歴史にそれほど興味がない方々からすれば、「会津の歴史を語る」と書いてしまえばあつという間にそっぽを向かれてしまうだろう。だが、数年前に放送され、美しい女優さんが主人公を演じられた会津藩の女性をテーマにしたドラマをベースにして紹介するとしたら、少しでも興味を持っていただけるだろうか。



若松城。地元では鶴ヶ城と言う。明治7年に取り壊されたが、昭和40年、たくさんの人々の寄付で再建された。

その会津藩の女性というのは「新島八重」であり、演じられた女優さんは綾瀬はるかさんである。美しく、透明感のある女優さんが演じた新島八重という人物は、当時（今から150年ほど前）としてはだいぶ型破りの生き様を見せた女性であるが、その女性を主人公とした会津の

歴史物語を、一年をかけて美しい女優さんが紡いでくださる様子を、私たちは心躍らせながら視聴したものである。その物語中で、要所要所に使われていた重要なキーワードがある。「ならぬことはならぬ」である。これは、当時の会津藩士たち（とその家族）が幼いころから教え込まれた基本理念「什の掟」（※注記）と呼ばれるものの一部であり、最も重要な部分である。強いて現代風に表現するならば、「駄目なものは駄目」だろうか。

物語の簡単な内容としては、会津藩の武家の娘として育った八重（当時は山本八重）が、20代半ばで会津戦争（1868年1月から翌年5月にかけて、京都から始まり五稜郭で幕をおろした戊辰戦争の中で、会津が戦場となった戦い）が勃発すると自ら武器を手に戦い、一ヶ月の籠城戦を耐え抜くと、明治時代に入ってから京都に移り住み、この地で出逢った新島襄と結婚



新婚当時の新島夫妻
（同志社社史資料センター所蔵）

してからは夫の勧めでキリスト教の布教と学校の設立運営に尽力するというものである。夫が亡くなり寡婦となった後は、日本赤十字社に所属し日清戦争（1894）・日露戦争（1904）では篤志看護婦として活動するが、この功績に対し二度も褒章を授けられる。

※什の掟（じゅうのおきて）

会津藩士の子供たち（男の子）は、藩校にあがるまえに、地域ごとにつくられているグループ「什」に所属して、遊びやお話など同学年や目上との関わりの中から自然に道徳や礼儀を身に付けていったが、そのなかで、必ず守らなければならないルールとして掲げられていたのが什の掟である。そのルールは、嘘をついてはならない・年上の言う事に背いてはならない・弱いものいじめをしてはならない等々、基本的なしつけのようなものであった。

■ 生涯貫かれた会津での「学び」の精神

要約してもこれだけ波乱に満ちた人生を送っているから、さぞ困難なことも多かっただろうと容易に想像できるが、八重は逃げた

りめげたりすることなく問題に立ち向かっていったのである。そして、最終的には自分の望む道を一步ずつ進んでいった。彼女を突き動かしていた原動力の一つには、生まれ育った会津で身に刻まれた「ならぬことはならぬ」という精神があっただろう。自分の信じる正義と信念を曲げずにいる事は非常に難しい。まして、当時は今とは比べ物にならないくらい男尊女卑の風潮が強い時代であるから、なおさらである。それでも八重が人生で成し遂げたことを考えると、「ならぬことはならぬ」という短い言葉には、強い覚悟と信念が内包されているように思えるのである。そしてこれが、「会津人」らしさなのかもしれない。

私たちが生きる現代では、この「ならぬことはならぬ」という精神を貫き続けるのは難しい。ともすれば「融通が利かない」「頑固」などと揶揄され、現代社会では浮いてしまうのかもしれない。それでも会津に縁ある私たちは、先人たちが身をもって示してくれたこの姿を、せめてほんの少しでも見習っていきたいところである。



山本覚馬 京都府顧問
（同志社社史資料センター所蔵）

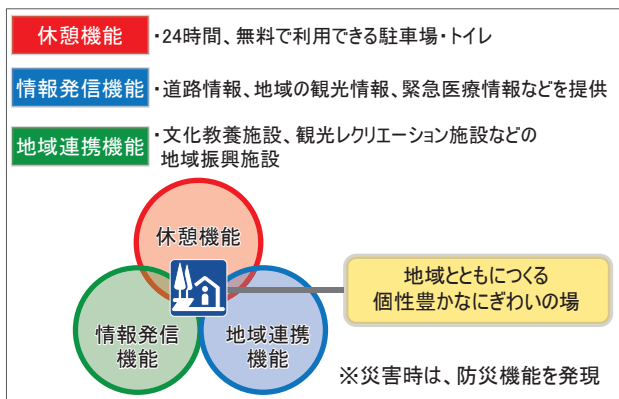
ちなみに、この新島八重のお兄さんである山本覚馬も大変有能な人物であった。戊辰戦争の際には一時期薩摩藩に捕らえられ幽閉されていたが、その最中に著した「山本覚馬建白」（通称：管見）で当時の日本を取り巻く状況や新しい国家の構想を記し、それが高く評価されたこと

で後に京都府顧問や京都商工会議所会頭などもつとめた。彼ももちろん藩校日新館で学んだ秀才であり、当時はまだ一般的には受け入れられにくかった蘭学（西洋の学問や技術）の造詣も深く、古い考え方しか持っていなかったと思われがちな会津藩にも、これほど開明的な人材がいたのだという証となるような人物である。これらを思うと、教育がいかに重要であり、「学び」がその人の人生を大きく左右するのだということにも気づかされるのである。

北陸「道の駅」最前線

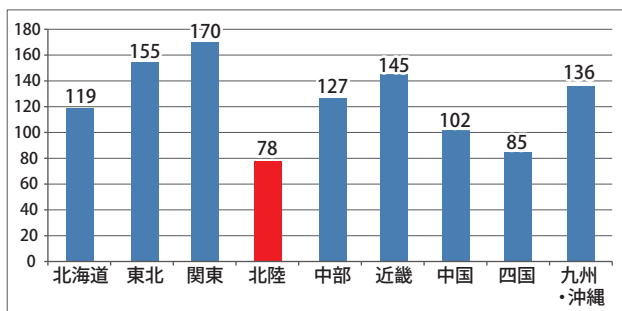
1. 「道の駅」とは・・・

皆さんは、「道の駅」と聞いて何を想像しますか？ドライブの途中にトイレ休憩、お土産や農水産物の購入、道路情報を見ることでしょうか。「道の駅」は、図-1のとおり、「休憩」「情報発信」「地域連携」の3つの機能が備わっていれば要件を満たします。最近では新鮮で安い農水産物の購入やその土地ならではの食べ物を目的に「道の駅」を訪れる利用者が増えています。



〈図-1 道の駅の3つの機能〉

「道の駅」制度は、平成5年に創設され、平成29年4月21日の第47回登録で全国1,117箇所となりました。北陸の「道の駅」は78箇所（新潟県39、富山県14、石川県25）と図-2のとおり、各地方の中では最も「道の駅」の数は少ないですが、利用者の満足度を高めるために様々な取り組みをしています。



〈図-2 地方別道の駅数〉

2. 北陸「道の駅」の特徴的な取り組み

「道の駅」では、地元産の新鮮な野菜や魚が

北陸「道の駅」連絡会事務局 大堀 和明

販売されており、どこも人気が高く午前中に売り切れてしまう「道の駅」もあります。また、観光客向けには、日持ちがするコメや加工品などが人気です。



〈写真-1 織姫の里なかのと：カラー野菜〉

写真-1の「道の駅織姫の里なかのと」は、地元産カラー野菜で健康を売ることをテーマにしています。カラー野菜は強い抗酸化作用を持ち、美容、老化防止、病気の予防などの効果が期待されます。機能性やレシピも紹介しており、利用者に人気です。

また、その土地ならではの旬の食べ物は人気があり、それ目当てに多くの利用者が訪れます。

北陸では、富山県氷見市、高岡市、射水市など複数の「道の駅」が連携して、ご当地カラーコロッケを売り出しています。寒ブリ、ホタルイカ、白エビなどの海産物を全面に売り出している「道の駅」もあります。写真-2は、「道の駅カモンパーク新湊」で提供している「白エビバーガー」ですが、このようにご当地でしか食べられないモノが人気を博しています。



〈写真-2 カモンパーク新湊：白エビバーガー〉

「道の駅カモンパーク新湊」では、希少海産物による新メニューを開発、試食会を行うことで、リピーターを増やす取り組みを行っています。

今後の「道の駅」の課題は、1度訪れた利用者に対して繰り返し訪れてもらうため新しい魅力づくりを行っていくことです。

そこで注目されるのがコトの消費です。

コトの消費で人気が高いのは、温泉施設です。

温泉施設は、北陸の「道の駅」で利用者が減少する冬期間でも利用者が見込めるため、北陸「道の駅」でも14箇所を設置されています。利用者にも好評で「癒やされた」「ドライブの疲れがとれた」などの声を多くもらっています。



〈写真-3 ちぢみの里おぢや：温泉〉

そして、最近、人気が高まっているのが「道の駅」での体験型コト消費です。

ここでは、北陸「道の駅」の体験型コト消費の取り組み事例を紹介します。

(1) 道の駅たいら —インバウンド型体験—

日本を訪れる外国人観光客の増加は、これまでの東京、京都などから全国的な広がりを見せています。地方のインバウンド観光の受け皿として期待されるのが「道の駅」です。

かつての中国人観光客に代表される「バク買い観光」から「体験型観光」に移行しています。

特に日本の伝統文化体験は、外国人に人気が高く観光の目玉の1つになっています。

「道の駅たいら」がある富山県南砺市は、世界遺産の五箇山合掌集落などがあり、近年は中部国際空港から能登半島に向かう「昇龍道（ドラゴンルート）」の観光ルートが確立されつつあります。そこで、「道の駅たいら」は、地域の伝統工芸「和紙すき」に着目して、「道の駅」

内にある体験工房で「和紙すき体験」を行っています。

「和紙すき」は、地域の高齢化、人口減少により、後継者不足に悩んでいましたが、「道の駅」での体験指導により雇用が生まれました。現在、「和紙すき」の技術を受け継ぐ後継者として和紙の技術習得を目的に来日している外国人をスタッフとして雇用し、技術を学ぶとともに外国人観光客への体験指導を行っています。

外国人スタッフの導入は、利用者や観光業者、添乗員にも好評で「道の駅」利用者、売上げも伸びて地域に活気を与えています。



〈写真-4 たいら：和紙すき体験〉

(2) 道の駅みつまた —アウトドア体験—

新潟県湯沢町にある「道の駅みつまた」は、町内を訪れるアウトドア体験観光客向けにmont-bellと契約締結してアウトドア用品販売を行い、地元アウトドアイベントの支援を行っています。写真-5は、冬期間のスノーシュー体験イベントです。四季のアウトドアイベントと連携することで利用者の増加につながっています。また、アウトドア用品販売は、他の「道の駅」とは違うオシャレな雰囲気づくりを演出しています。



〈写真-5 みつまた：ナイトシューツアー〉

(3) 道の駅能生 — 地域間交流型体験 —

新潟県糸魚川市にある「道の駅能生」は、日本海海産物の販売や食事を中心とした「道の駅」です。年間約40万人以上の「道の駅」利用者がいますが、新たな利用者の拡大を狙い、海の無い長野県の小中学校を対象とした臨海体験を支援しています。その1つが、新潟県、糸魚川市、地元漁協、海上保安庁と協力し、「道の駅」で養殖・収穫体験を行うサザエファーム事業です。

体験した生徒が大人になって再び「道の駅能生」を訪れてくれるリピーターとなることを駅関係者は期待しています。



〈写真-6 能生：サザエ収穫体験〉

3. 北陸「道の駅」活性化の支援

北陸の「道の駅」に利用者が増え、活気ができるように北陸「道の駅」連絡会では、以下の事業を行い支援しています。

(1) 北陸「道の駅」SPOT

「道の駅」の機能の1つとして、情報発信があります。これまでは掲示板やパンフレットなどが主流で情報量や即時性への対応が困難でした。

そこで、もっと簡単に様々な最新情報を利用者が閲覧できるように、無料公衆無線LANを活用した道路情報提供システムとして、北陸「道の駅」SPOTを平成27年9月より導入しています。

この取組みは、全国的なものであり、北陸では、飲料メーカーと協力し道の駅SPOT対応型自動販売機を「道の駅」に設置しています。

使用方法は、スマートフォン等から北陸「道の駅」SPOTにアクセスして利用します。道路情報、気象情報のほかに、道路ライブカメラ

や観光情報等の動画、災害ポータル、周辺の医療機関情報など、様々な情報を提供しています。



〈図-3 掲示板から北陸「道の駅」SPOTへ転換〉

維持管理費は、自動販売機の売上げから賄われており、平成29年4月現在、北陸19の「道の駅」に設置されており、今後、設置箇所を増やしていく予定です。



〈写真-7 道の駅SPOT対応型自販機〉

(2) SNSを活用した「道の駅」利用者の情報交換の場づくり

各「道の駅」と利用者を繋ぐ、北陸「道の駅」公式インスタグラム、Facebook、Twitterを開設しています。



〈図-4 北陸「道の駅」ホームページ〉

図-4の北陸「道の駅」ホームページ右上赤丸で囲んだ部分から見る事ができます。

公式インスタグラムでは、あなたが好きな北陸「道の駅」の写真投稿を呼びかけており、「道の駅」での美しい景色など、様々なモノが掲載され、利用者の情報交換の場として活用されています。



〈図-5 公式インスタグラム〉

(3) スタンプラリー

北陸「道の駅」を巡って楽しめるイベントとしてスタンプラリーを実施しています。

図-6のスタンプブックを「道の駅」から参加費200円を支払って受け取り、各「道の駅」の押印欄にスタンプを集めます。



〈図-6 スタンプブック〉



〈図-7 全駅制覇認定証、ステッカー〉

全駅制覇した方には、図-7の認定証、ステッカーを進呈しています。また、スタンプを集めた数によって抽選で賞品を差し上げています。道の駅で割引を受けられるクーポンも付いていますので、皆さんも、ぜひ参加ください。

(4) サイクルステーション

健康志向からロードバイクなどの自転車の普及やサイクルイベントの増加により、サイクルツーリズム（自転車旅行）が盛んになってきています。そこで、全国の「道の駅」で自転車利用者に対応したサイクルステーションの整備が進んでいます。



〈写真-8 サイクルスタンド〉

サイクルステーションの登録をしている「道の駅」は、トイレ、休憩、食事などのサービス内容が掲載されたポスターを掲示しています。(図-8)また、空気入れや工具の貸出も行っています。

平成29年4月現在、北陸の「道の駅」は33箇所が登録されています。



〈図-8 サイクルステーションポスター〉

4. おわりに

今回紹介した「道の駅」は一部にすぎません。他の「道の駅」も利用者に楽しんでもらえるように様々な取組みをしています。「道の駅」を訪れることで新たなモノやコトに出会えるかもしれません。ぜひ、この機会に北陸の「道の駅」めぐりをしてみてはいかがでしょうか。

シリーズ「次世代に向けた地域の魅力づくり」

「おこひる」で伝えたい！先人の知恵、おもてなしの心

YAMANBA ガールズ（長野県大町市）



青木湖で養殖された姫マスを背開きにして乾かし、油で揚げ、たれを絡ませてつくる「姫マスのすずめ焼き」

信州特産のアスパラと北アルプス山麓の清冽な水と野菜、空気で育った黒豚でつくる「アスパラの黒豚肉巻き」。紫蘇葉巻きお餅。



情感豊かに民話を語り、おこひるの雰囲気盛り上げる平林さん



盛りつけの指導をする長嶋先生(左)と丸山代表(中央)



手際良く、料理するお母さんたち

6月に提供された「田植えのおこひる」

「おこひるの記憶」は会期中の土曜・日曜・祝日のお昼、木崎湖西南湖畔で開催される(要予約・¥1500)。

7月のテーマは「湖と塩の道」。「信濃雪マス塩釜焼き」など、塩を使った料理が提供される。

芸術祭にあわせユニット結成

今夏、大町市で「北アルプス国際芸術祭 2017—信濃大町 食とアートの廻廊—」(以下 芸術祭)が開催される。

「YAMANBAガールズ」は、芸術祭で地域のお母さんたちと一緒に郷土料理をつくり、民話等の語りとともにおもてなしをしようと、昨年1月、女性有志4人(丸山令江子代表、平林信子さん、菅沢奎子さん、鈴木幸佳さん)で結成された。公募された「アート・プロジェクト」の審査を通過し、「おこひるの記憶」として出展する。「おこひる」とは、農作業の合間に食べる簡単な食事のことで、初夏の信濃大町の暮らし、風景が感じられるように、6月は「田植えのおこひる」をテーマに提供される。

信州の食文化をお母さんたちが発信

4人は「NPO法人ぐるった^{*1} ネットワーク大町」や「大町民話の里づくりもんぺの会」で活動しており、「信濃大町 食とアートの廻廊 2014^{*2}」で食のプロジェクトに関わった。受け継がれてきた先人達の生活・食の知恵を「伝

えたい」という思いを持つメンバーを事務局の鈴木さんがつなぎ、郷土料理家の長嶋勇次先生ながしまゆうじを招き、民話の伝承と結びつけ、今回の企画、応募、出展へと活動を進めてきた。3月から、料理講習・試食会、プレツアーを開催し、準備してきた。本番間近の活動取材した。

5月17日夜、5月12日のプレツアーでの課題を整理していた。

「芸術祭のためにお母さんたちが集まり、郷土料理を一から学び提供していることを説明する必要がある」。「語りの時は、調理場の音が聞こえないように注意する」。「天ぷらは揚げたてを出したいが、松花堂に盛りつければ、配膳時間を短縮でき、お客様との対話の時間を増やせるかもしれない」。「食材、料理について誰でも答えられるようマニュアルが必要」、「凍り餅を吊して寒干、保存食など先人の知恵を紹介したらどうか」など、熱の入った議論が行われた。約1時間という限られた時間の中でどうしたら大町の食文化を心に残る作品として表現できるのか、開催間近の緊張と高揚がひしひしと伝わってきた。

途中、夕食にと、メンバー手作りの煮物、凍り餅を炒めたお菓子、漬物などをいただいた。「打合せの時は、いつも料理、お菓子が集まります」と言い、「今回、郷土料理を調べ、『凍み大根と身欠き鯿にしんの煮物』を知りました。大寒に干し保存していた大根と初夏に出回る身欠き鯿で田植えを手伝ってくれた人に感謝の気持ちを表していた。大町の人は昔から料理でおもてなしするのが好きなのね」と丸山代表。

※1「ぐるった」とは、この地の方言で「周辺」や「まわり」という意味。

※2 北アルプスに抱かれた地形を「廻廊」にみたくて始まった芸術祭

■ 心に響き残る「おこひるの記憶」

翌日、開催前の最後の調理・試食会が開催された。長瀧先生の「今日はレシピをしっかりと確認してつくってください」とのお話の後、丸山代表から昨日の打合せを受けて伝達事項、注意点、タイムスケジュール等が細かく説明された。

4グループに分かれ、1グループで、2品を担当する。メンバーの他、長瀧先生の料理教室の生徒さん、会期中のお手伝いの募集を見て参加してくれた人など25人が集まり、手際良く料理がつくられていく。



漬物の水切りの仕方を伝えながら調理するお母さん(左)

今回は松花堂弁当への盛り込みがポイントで、長瀧先生が姫マスの尻尾が右上になるよう、丸山代表が煮しめの盛りつけは彩りに注意するよう各テーブルを回り指導する。お弁当

が会場に並び、お茶が出され、いよいよ「田植えのおこひる」がスタート。

平林さんが民話『爺の雪形』を通る声で静かに語る。北アルプスの山並み、清冽な雪解け水、澄んだ空気、四季折々の美しい自然を映すにしな仁科三湖や龍神湖(大町ダム湖)などの大町の風景とともに、登場人物の暮らしぶりが浮かんでくる。厳しい自然の中で生きていくための先人の知恵、食への感謝、家族愛などへと思いが及ぶ。

語りが終わりと、丸山代表の挨拶の後、お母さんたちが心を込めつくってくれた料理に感謝し箸を取る。それまでの沈黙が破られ会場に楽しそうな声が響く。

■ 最高のおもてなしは地元の家庭料理

最後に、芸術祭の先輩、瀬戸内国際芸術祭食のプロジェクトの河端直之さんから「お客様といっしょに楽しむことが一番のおもてなし」、田邊詠津子さんから「景色もごちそう。風景が浮かんでくる演出が大切」などのアドバイスがあった。



民宿経営をする松澤秀美さん(左)は、企画に興味を持ち参加、田邊さん(右)と食、観光と話しが盛り上がる。次世代の食の交流も生まれている。

「今、時代が変わっている。ホテルのクックをしている頃は、外国の料理を学びお出しする機会が多かった。退職後、信州の食材の素晴らしさを再認識し郷土料理を教えている。受講生は、習った料理を喜んで食べてくれる、家族や客人の笑顔を見るのがうれしくて私の教室に通っている。地元でつくられた食材を使った家庭料理が一番心に残るおもてなしになる」と長瀧先生は言う。

大町の「山姥^{※3}」(YAMANBA)のように地域のコンサルタントとして、食の魅力を掘り起こし、ガールズのような熱い想いを持ち続け活動したいというメンバーの最初の大きな挑戦が始まろうとしていた。

※3 大町に住む山姥は里人の相談にのるなど知恵者だった。

取材協力：YAMANBA ガールズ

TEL:090-4461-3863

<http://omachi.chicappa.jp/yamanba/>

北アルプス国際芸術祭 2017
—信濃大町 食とアートの廻廊—

【開催日程】平成29年6月4日(日)～7月30日(日)

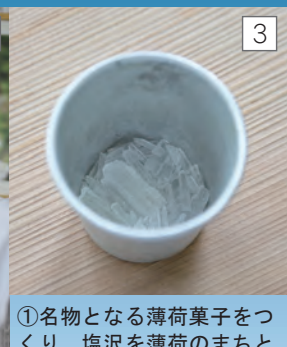
【公式HP】<http://shinano-omachi.jp/>

江戸人の涼菓を平成につなぐ「薄荷葛きり」^{はっか}（新潟県南魚沼市）

塩沢の薄荷の歴史を紐解く中でヒントを得て、試行錯誤を重ね販売に至った「薄荷葛きり」。薄荷のシロップと葛きりが絶妙な甘味と清涼感を喉に運ぶ。



牧之（ほくし）通りを訪れるリピーターに人気がある「薄荷葛きり」。ここで生涯を過ごした江戸後期の文人、「北越雪譜」の著者、鈴木牧之の名をとり「牧之通り」と名付けられた。雁木と切妻屋根が続く街並みは宿場町の風情が漂う。



- ①名物となる薄荷菓子をつくり、塩沢を薄荷のまちとしてブラッシュアップしたいという青木則昭さん。
- ②かつて薄荷は農産物として流通し、資料も多かった。写真は江戸時代に編さんされた『和漢三才図会』（わかんさんさいずえ）。
- ③「薄荷圓」として販売された薄荷の結晶

塩沢の気候を活かし良質な薄荷を販売

「塩沢（南魚沼市塩沢）付近は、魚野川流域に野生の薄荷草が自生し、古くから薬草として使われていました。戦国時代、上杉謙信が、現在、私の店がある場所にあった越後上田郷塩沢大館に滞在した折、薄荷を献上され、大変喜ばれたという言い伝えがあります。記録では、江戸時代の天保期（1830-1843）頃、薄荷を精製し、その結晶を『薄荷圓』^{はっかえん}という商品名で販売したとあり、当時、6～7軒が販売していたようです。せき・たん止め、頭痛・歯痛の痛み止め、めまい・たちくらみ・かご酔い等の症状緩和に効果があり、三国街道を旅する人たちの必需品だったのでしょう」と説明してくれた青木則昭さんは、塩沢名物「はっか糖」で有名なお菓子のアオキの3代目である。大学卒業後、老舗和菓子店で3年修業した後、「塩沢と薄荷」をテーマに家業についた。

この土地の気候を利用し、冬、薄荷草を蒸留器で精製し、抽出された水と油を分離するために零度近くまで冷やす必要があります、これに雪が使われていた。成分が濃い塩沢薄荷は品質が高く、江戸や大阪でも評判で海外にも輸出されていた。石川雲蝶や熊谷源太郎が彫刻した

「薄荷圓」の大看板が三国街道の名物となっていたことから、往時の繁栄が偲ばれる。



左：高田家（旧・脇本陣）の前にある薄荷圓の看板
右：青木家が薄荷を商っていた時代の熊谷源太郎作の大看板の版画。彫刻は看板の一部。（青木酒造所蔵）

今も手作業でつくられる「はっか糖」

「はっか糖」の製造にも塩沢の盆地特有の気候が利用されているようだ。

「作業工程は飴といっしょですが、できあがった飴に湿気を与えて砂糖に戻す『かえし』で『はっか糖』になり、口溶けの良さが生まれます。その日の気温と湿度で煮詰め温度が変わるので、天気が読めないと今でも失敗することがあります」と昔ながらの手作業でつくる難しさを語る。

食べた瞬間、体を突き抜ける爽やかさを感じる「はっか糖」が、室温40度を超える部屋で、70度の飴を素手で整えながらつくられることに驚いた。どの店で最初に作られたかは分かっていないが、現在、塩沢には「はっか糖」をつくっている店が4軒ある。入れる薄荷の量が店毎に違うので、好みの店をみつける楽しさもあるそうだ。



「はっか糖」昔ながらの白の他に抹茶、和三盆がある。



砂糖を高温で煮詰め、冷却した後、薄荷の結晶を練り込み、「絹引き」という作業を行い、長い棒状の飴に整える。

「薄荷甘粉」にヒントを得る

青木さんは、塩沢を「薄荷のまち」としてもっと知ってもらいたいという思いから、少なくとも3つ、薄荷を使った菓子が必要だと考え、江戸時代の文献を読みヒントを探した。そして「薄荷甘粉」に巡り会う。当時、精製した結晶から残っている油分を取り除くため、葛粉の上に和紙を敷き、結晶を広げ3週間くらい置いていた。その時に使った葛粉に薄荷の香りが残っているため、砂糖を加え、夏、水に溶かし飲用していたという。

「栄養がある葛と薄荷の清涼感は夏に合う。先代の父のメモにも『薄荷甘粉』があった。葛切りにして混ぜてみよう」と早速試してみるが、葛粉だけではすぐに固まってしまい土産ものには向かない。また結晶は溶かすと油に戻り、分離してしまう。配合を替えて何度もつくるが、なかなか上手くいかない。「やめた」と思う時もあったが、夢に「配合案」が出てくる。最後に、納得はいかなかったが、ゲル化剤を入れてゼリー状にすることにした。さらに薄荷の清涼感を活かすためマルトース（麦芽糖）を使い、低甘味のシロップに仕上げた。

「薄荷葛きり」として販売に至るまで実に2年の月日を要した。構想から30余年の紆余曲

折を経て『北越雪譜』を出版した鈴木牧之に重なる意志を感じる。



2年の月日をかけて開発された「薄荷葛きり」。4月下旬から10月上旬、店頭に並ぶ。

薄荷のまちを目指して

清涼感を求めてつくられた「薄荷葛きり」は期間限定で販売されている。

「葛きりにコシがあり、『はっか糖』より薄荷を多く使っているため飲み込んだ後、薄荷の清涼感が続きます。3月になると花粉症のある人から問合せが入ります。病気で『薄荷葛きり』しか食べられないと、まとめ買いをする人もいます。走る前に飲むと呼吸がしやすくなると『南魚沼グルメマラソン』に参加される方、毎月(5月～11月)開催される『軽トラ市』に参加し、『薄荷葛きり』を食べて帰る常連さんもいます」と話し、「最初は観光バスなどで牧之通りに来られる方が多いようですが、その後、ゆっくりと通りを歩き、店に入り会話を楽しみたいというリピーターがたくさんいます。その人たちが舌で確かめた味を人づてに聞き、地元の人が買いに来ることが多いですね」と声が弾む。

「これからはつくるだけでなく、語り継ぐことも必要です。地元の小学校で薄荷と塩沢の歴史を教えることもあります。3つ目の薄荷菓子ができたら連絡しますね」という言葉に自信が感じられた。

「江戸のむかし この宿場街にミントの涼菓があったとき」とパッケージに書かれた「薄荷葛きり」を口に入れると爽やかな香りが広がり、次第に体の中が冷えていくのが感じられる。涼やかな風がとおり、「平成のむかし この牧之通りに薄荷菓子が3つ あったとき」と子供たちが口ずさむ声が遠くに聞こえた。

取材協力

有限会社 青木商店
新潟県南魚沼市塩沢81
電話 025-782-0047



青木商店は江戸時代から続く老舗で、明治時代から薄荷を販売していた。

特集「地域とともに」

「北陸地域の活性化」に関する研究助成事業

(一社)北陸地域づくり協会は、(社)北陸建設弘済会時代の平成7年から、公益事業として「北陸地域の活性化」に関する研究助成事業制度を続けており、地域活性化に成果が期待できる事業を募集・採択し支援しています。今回は、第19回(平成26年度)事業で助成した能美柚ゆうゆう倶楽部の活動を能美市の動きと合わせ紹介します。

「ゆずある暮らし」づくり～「国造ゆず」の地域ブランド化に向けて～

能美柚ゆうゆう倶楽部(石川県能美市)

「ゆずの里」をつくりたい

能美市の中山間地域に位置する国造地区^{こくぞう}では、昔から民家の庭先にゆずが植えられていた。昭和55年、この地区で行われた集落座談会で、このゆずに着目し、転作作物として導入することが決まった。翌年から苗木の植え付けが始まり、昭和60年、61年には、「和気ゆず団地」が造成され、木頭、多田錦の2種、約1,000本が植えられ、ゆず農家は46戸あった。

国造柚子生産者組合の前組合長・河原省吾さんは、「転作を機に『ゆずの里』をつくりたいと、京都、和歌山の産地を視察し、この地に昔から植えられていた木頭^{きとう}のほかに、多田錦を植



※実が大きい木頭はゆず味噌、ジャムに使われる

えることにした。多田錦は種が無く、多汁で香りもいい。県内で栽培しているのは能美市だけで、木頭よりもよく熟意に感謝している。

行政(旧辰口町役場)が主導し、農協が部会を設置し農家を管理する体制でスタートしたが、米、大麦、大豆、加賀丸いも、はと麦と農作物に恵まれているこの地では、豊作の「表年」と不作の「裏年」があり、安定した収入が得にくいゆずは敬遠され、また高齢化、後継者不足も重なり、手入れされず放置される木が見られるようになった。ゆず農家も6戸に減っていた。

そんな中、国造ゆずの魅力を伝え、かつてのようにゆずがある暮らしを楽しみ、地域活性化につなげようと国造柚子生産者組合員、ゆず好きな市民などで「能美柚ゆうゆう倶楽部」が平成24年7月、河原さんを会長(現在の会長は川北重信さん)に結成された。

付加価値でリスクを補う

ゆうゆう倶楽部は、ゆずの講話、収穫体験、

料理開発等で学ぶ「ゆず大学」の開催やゆず果汁の販売、Facebookでの情報発信を続けファンを増やしてきた。収穫に合わせて11月第2土・日曜に開催される「国造柚子まつり」では、ゆずやゆずを使った加工品が毎年完売する人気だ。

「表年だと10トン、裏年は2トンと生産量が全く違うため、出荷先確保と保存方法が課題だ。平成28年から能美市でも養蜂を開始した『みつばちの詩工房』が、無農薬栽培の国造ゆずで『柚子みつ』をつくりたいと定期的に購入してくれるようになった」と消費者の食の安全への関心が高まり、無農薬栽培に注目する事業者が出てきたと河原さんは喜ぶ。



国造ゆず果汁

注目度アップと比例し、「国造ゆず」を使った製品が多数の事業者で開発・販売されるようになった。

市も、国造ゆずを加賀丸いも(商標登録済)につぐ能美の特産品と位置づけ、地元の大学に商品開発を働きかけ、ドレッシング、ハンドクリーム等が誕生している。

産業建設部農政課主査の村本志朗さんは、「先日も和菓子に600kg使いたいと問合せがあったが、持続的に取引ができないため契約が成立しないケースも出てきている。このような状況で販路を確保していくには、他産地との違いを明確にできる付加価値をつけていくしかない。有機JAS認定を取得して一気に売り込む方法もあるかもしれないが、ゆうゆう倶楽部の活動で、日々の暮らしにゆずを取り入れ、楽しもうという機運が芽生えてきた。地元で使える量が減れば地域の意識と乖離してしまう」と、石川県が今年度から始めた「特別栽培農産物^{※1}」の認証申請を手伝った。

※1 農薬や科学肥料を通常の5割以上減らして栽培された農産物。有機JAS認定より基準はゆるい。

■身の丈にあった産地づくり

昨年10月、市が事務局となり、生産継続と販路拡大を目指し、生産者、農家レストラン経営者などで、官民一体となってゆずの生産、6次産業化に取り組んでいる高知県馬路村を視察した。

村本さんは、「参加者の中には、馬路村を模倣しながら販路拡大を目指していた人もいたが、国造地区の10倍規模の産地を目の当たりにして、この地区にあった産地づくりが必要だと気づいたようだ。最近、自ら応援者を見つけ、ゆず畑を手伝ってもらっている」と変化を感じている。

ゆうゆう倶楽部は、今年度、「国造ゆずゲストオーナー制度」を始動した。初夏から晩秋にかけてゆず農家体験をしてもらい、後継者の発掘につながればと企画した。果樹農園をつくりたいと夢をもつ農家、ゆずを使った商品開発に取り組みたいという人、「ゆず」と名付けた子供といっしょにゆずについて学びたいという人など12組の申込みがあった。

「将来の後継者を一人育てるよりも、まず週末、ゆずの生産を手伝ってくれるサポーターを集め栽培を手伝ってもらおう。その中で一人でもゆず農家に育ってもらえればいいのではないか」と村本さんはその活動を見守っている。



「国造ゆずゲストオーナー制度」では、「ゆずの花見」、「青ゆずの間引き」、「ゆずの収穫」、「国造ゆずまつり」を体験し、ゆず農家の気分を味わいながらゆずの魅力にふれる。参加費は年間4,000円。写真は6月4日に開催された「ゆずの花見」。



■関係者が連携し産地意識を醸成

市とゆうゆう倶楽部は、今年の「国造ゆずまつり」でゆずの種や苗を配る計画を練っている。自分でゆずを植え育てることで、ゆずに愛着を持ち、産地の意識を醸成し、将来的には、辰口温泉までつながる「ゆず街道」をつくりランドスケープにしたいと考えている。この計画に、県の出先機関が協力してくれることになった。特別栽培農産物認証と合わせ県の特産品として「国造ゆず」をアピールするチャンスが到来している。

生産農家の^{うしろ}後さんは、「焼酎のゆず割での晩酌は最高だ。ゆずの飲み比べもオツ。和食、洋食を問わずゆずは料理を引き立てることを知ってもらいたい」と笑顔で話す。

ゆうゆう倶楽部の東山彩子さんは、「まず各家庭にゆず果汁を一本置いて、毎日使ってもらいたい。子供たちには、国造ゆずまつりに合わせ学校給食でゆずを使った料理を出してもらい、ゆずが食卓にある暮らしを知ってもらえるといい」と地道な活動から産地の意識を変えていきたいと言う。

ゆうゆう倶楽部の水本協子さんは、「現在、生産者、事業者、サポーターが個別に商品開発に取り組み、商品標記^{※2}、取り組み姿勢に違いが出ている」と今後、地域ブランドとして育てていく上で課題になりそうだと危惧している。

「ゆうゆう倶楽部の中に『利用者会』を設置し、国造ゆずの価値、情報を共有し、ゆず大学などの催しの共同開催、ゆずアイテムの開発・共同販売でつながっていききたい。販売するだけでなく、ゆずがある生活スタイルを地域ブランドとして発信したい」と市に相談しながら準備を進めている。

市も特別栽培農産物認証制度の更新申請も考慮し、「国造ゆず特別栽培ネットワーク」でゆるやかに生産者が連携していけるよう働きかけている。

地域のブランドづくりで行政の役割は重要だ。生産農家、事業者にしっかり寄り添い、ゆうゆう倶楽部等の市民と連携して地域を盛り上げる土壌をつくる。

地域の豊かさ実現に向けた舵取りを期待する。

※2 国造地区で生産されたゆずは、「国造ゆず」、「国造ゆず」、「辰口ゆず」など商品名は統一されていない。



左から村本志朗さん、水本協子さん、東山彩子さん、河原省吾さん、後政樹さん

取材協力：能美市・能美ゆずゆうゆう倶楽部

- 「国造ゆずゲストオーナー制度」問合せ
東山さん 電話 090-1393-2770
Facebook「能美ゆずゆうゆう倶楽部」

会員だより

瑞宝中綬章

藤芳 素生 氏

(東京都江東区在住)

元北陸地方建設局
千曲川工事事務所長



北陸の地域づくり・人づくり

この度、叙勲の榮譽を受け皆様より過分な祝意をいただきました。これもひとえに若い時分に育てて下さった北陸の先輩同僚のご指導ご厚情のおかげと感謝申し上げます。

公務員生活は中部地方建設局から近畿地方整備局まで28年、忙しくも楽しく過ごさせていただきました。北は北陸から南は九州、インドネシアまで転勤16回、転居15回と家族には本当に苦勞をかけました。

その中でも北陸の経験は今でも思い出に残る貴重な日々でした。初めての事務所長で事務所や地元の皆様にお支えいただき、いくつもの将来の糧となる仕事をやらせていただきました。長野の皆様は理論家で理屈っぽいとの評価ですが、本当です。本省に帰った時に、長野出身の局長に今度講演があるので長野の良いところを聞かせてほしいとのご下命がありました。三つ申し上げました。

- ・一斉に開く長野の春
(梅から桜、林檎まで続けざまに開花する)
- ・実践学習の信濃教育
(気づきを優先する現在の教育の基本)
- ・個人より地域優先
(自己より集団の意思を尊重する)

一番と二番は皆様ご承知でしょうが、三番目の地域優先は実際に千曲川の用地交渉で経験させていただきました。事業説明でその事業が地域にとっていかに必要であるかを住民一人一人が積極的に発言し確かめていました。事業が認められると、個人個人の価格交渉は実にスムー

ズに行きました。他の地域とは全く違った考え方です。古から四方を山に囲まれ、豊かな地域を自ら守るため地域共同の考え方が根付いているからなのでしょう。

長野の諸先輩に一家言を持つ猛者が多いのが理解されるでしょう。誰とは申しません。

北信の治水促進同盟会会長であった中野市長の土屋武則さんもその一人。立ヶ花の狭窄部で受益が小さく事業の優先度が低い地区で毎年浸水していました。すると市単費で地域道路と称して小堤防を造り始めました。市長の心意気には恐れ入りました。すぐに予算を確保し、直轄の堤防の用地を買戻し暫定ですが築堤に取り掛かりました。

千曲川の予算は当時飯山の激特が終わり激減しており、改修計画は遅々として進みません。治水は全体では長年にかかる事業になりますが、地元の説明の際には100年かかる事業では体をなしません。そこでセパレート21と称し、堤防法線を川の傍から人家がある線まで引いた輪中堤を牛出・栗林に計画し土屋さんに相談しました。リンゴ畑を河川敷にするこの計画に快く土屋さんは同意してくれました。地域の総意を優先する信濃人の鏡でした。

長い間千曲川会の会長を仰せつかり度々長野を訪れましたが、地元の有志は健在で事務所後輩の指導はもとより治水碑の清掃など地域活動が活発です。是非ともこの伝統を次の世代につなげて北陸の地域づくりに貢献していただきたいと思っています。

公務員生活を終えて、お世話になっている会社とともに全国防災協会、川に学ぶ体験活動協議会、日本水フォーラムなど公益法人の活動に携わっていますが、これからも北陸の皆様感謝しつつ残りの人生を精一杯尽くしてまいりたいと存じます。引き続きご指導方よろしくお願い申し上げます。

「平成 29 年春の叙勲」で、栄えある勲章を藤芳 素生さん、伊藤 宏美さん、梅本 良平さん、佐々木 盛悦さんが受章されました。長年のご功績が顕彰されたものであり、心からお祝い申し上げます。4 名の方にご寄稿いただきました。

瑞宝双光章

伊藤 宏美 氏

(埼玉県さいたま市在住)

元北陸地方建設局
阿賀川工事事務所長



らん しょう
濫 觴

この度、栄えある瑞宝双光章を受章できましたことは誠に喜びに絶えず、北陸地方整備局はじめ多くの方々に感謝申し上げます。

振り返ってみると、国家公務員歴全 26 年のうち北陸地方建設局には都合 12 年余お世話になっている。他の地建の経験はない。昭和 41 年の新採配属通知は新津工事事務所関屋分水支所となっていて、その 4 月 1 日に同所で「旧信濃川工事事務所」が発足した。現在の信濃川下流である。調査設計課の庁舎はバラック建てであって、夏の暑い日には屋根に放水して涼を取っていた。1 年余の勤務以降、地建内では調査畑を歩き、長岡（現信濃川）3 年弱、河川部河川計画課 2 年、金沢 2 年と合わせて 8 年に及んだ。

その間、いろいろと経験させてもらったが、自分なりに達成感を得たのは、「貯留関数法による流出計算」プログラムの開発である。当時は局に大型電算機が入ったばかりで、全地建で初となる積算業務の電算化開発の最盛期であったが、他の一般的なプログラムも演算可能となっていた。その入力方法はハードパンチャーで穿孔した紙テープによる原始的なものである。同時期、河川部では諸水系の流量改訂作業が進行中で、その時に作ったのが上記のプログラムである。どの河川でも利用できる仕様と

なっていて、その演算時間は複雑な構造の信濃川水系で約 20 分を要した。

後に、平成 4 年、卓上パソコンで同様のプログラムを使って再現したところ、約 20 秒と大きく短縮しており、計算機の進歩に驚かされた。また同 15 年には、人の縁で、時の河川計画課長に信濃川流量検討の経緯などを説明する機会を得、まだ少しは頼りにされていることを実感し、嬉しい限りであった。

地建再度の勤めは阿賀川で、昭和 61 年から 4 年余の間に、大川ダムの竣工式と土木学会賞受賞などを経験した。それまでダム事業には素人同然であって、「直会」とか「四阿」とか初めて聞く言葉が多く先が思いやられたが、多くの方々に助けられた思いしか残っていない。ただ、何かの折に使った「濫觴」という言葉が担当者らに受け入れられ、竣工は終わりではなく、今後のダム管理の始まりであることの認識に大いに役立ったものと思われる。また、祝賀会に出される清酒のラベルに使われたりして、会の盛上げに一役買ったのではないかとの印象が残っている。

ここで濫觴とは、長江のような大河も水源にさかのぼれば觴を濫せるほどのわずかな水量であるとの意で、物事のはじめをいう言葉なのだが、この度もこれが当てはまるのではないかと思われてくる。

最後に改めて、受章ありがとうございました。北陸への想いがますます楽しいものとなります。

瑞宝双光章

梅本 良平氏

(千葉県千葉市在住)

元北陸地方建設局
企画部長



北陸の思い出

このたび、栄えある叙勲を受けることが出来ましたのも、諸先輩並びに、これまでご一緒させていただいた皆様方のご指導とご鞭撻の賜物と、厚く感謝申し上げます。

かえりみますと、建設省に採用され最初に赴任したのがこの北陸地建の今はなき上越国道工事事務所でありました。その後、千曲川工事事務所を経て、全国各地を巡った末、最後に勤めることとなったのが、北陸地建企画部でありました。北陸は、小生に強いインパクトを与えた所でもあります。

今でも記憶に残っている、若いころの思い出(失敗話?)の一端を記してみたいと思います。

当時、調査係に配属されていたのですが、手回し計算機(通称脱穀機)、青焼きの図面など、前時代の遺物がまだ残ってありました。また、コンサルタントへの依存度もそんなに高くなかったかもしれません。交通量調査、道路の計画路線を地図に落とす作業、簡単な構造物の設計なども直営でやっていました。あるとき、係長に命ぜられて、擁壁の設計を行いました。初めてのことであり、しごく真面目に、経済的になるように考えながらやったつもりでした。そして、その成果が思いもかけず、そのまま現場に持っていかれて、施工されたのです。しばらくして、現場に行ってみると、施工業者の方から、この形は複雑で施工しにくい、掘削量・コンクリート量が増えてもいいから単純にしてもいいか、と言われてしまいました。設計一つとっても、経済合理性だけでなく、幅広い要素を勘案せねばならないと学んだのでした。

千曲川工事事務所では、信濃川水系の流量改定の真ただ中でありました。こちらでは、流出計算等は当時、本局にあった電算センターで行っていたのです。長野から新潟へ出かけては、紙テープのデータを流すのですが、時には、計算結果がうまくでないこともあり、課長と電話を通して、データをひとつひとつチェックするという苦勞を味わったものでした。

当時は、バイパスの計画づくりが中心で、今でいう関越自動車道は遠い先のことのように感じていました。もちろん、上越新幹線も長野新幹線もなく、帰郷の際は、六日町に一日2回だけ停車する特急「とき」もしくは急行「佐渡」、長野からは、特急「しなの」によく乗っていたのを思い出します。

そして、全国を巡って23年後(今から数えても、はや22年前になります)、北陸に戻ってきました。高速交通網は見違えるばかりですし、越後湯沢のマンション群にも驚きました。一方で、魚野川沿いの八海山などの山並みが変わらない姿を見せてくれてうれしく思いました。

その頃すでに、高齢化の進展が心配され、地域の衰退の兆しがみられる中で、地域おこしの試みも行われていたのを思い起こします。近年、高齢化や人口減少がますます進行する中、「地方創生」が大きな課題となっており、地域の持続的な存続の議論や活動が展開されています。

北陸地方でも素晴らしい地域がたくさん生まれることを願っているところです。

瑞宝双光章

佐々木 盛悦 氏

(新潟県新潟市在住)

元北陸地方整備局
用地調整官



瑞宝双光章受賞に思う

平成 29 年春の叙勲で瑞宝双光章の栄に浴し、喜びの気持ちで一杯です。

これもひとえに諸先輩、ご同輩、後輩の皆様方から賜りました暖かいご指導、ご厚情のおかげと心から感謝申し上げます。

私がそもそも公務員、北陸地方建設局を職場として選択したのは、私が高校 3 年生になった時の 1964 年 (昭和 39 年) 6 月 16 日 13 時 01 分発生の新潟地震でした。

この地震は同年 6 月 6 日から 6 月 11 日まで開催された新潟国体が終了してから 5 日目に発生したものです。(参考に新潟国体は、その年の秋に東京オリンピック開催のため春に開催されたものです。そうして、新潟地震により夏の国体開催が中止された結果、新潟県が天皇杯、皇后杯を同時に獲得しました。)

当時の新潟地震の象徴的なものは、石油コンビナートの石油タンクからのもうもうたる黒煙を上げる映像と新潟国体のために新築された昭和大桥の落橋が象徴的にテレビの映像に流されていました。

現在も私はこの映像が臉に浮かび、当時高校 3 年の学生生活 (高校通学時) には越後線の信濃川鉄橋を歩いて通学した思い出が残っています。

こうした状況の中で、当時進路をいろいろと思いをめぐらしていたところ、新潟市が甚大な被害を受けたことで何とか私もこの地震の復興に関わる仕事に付きたいとの思いから公務員試験を受験し、運良く合格して希望していた、当時の北陸地方建設局新潟国道工事事務所に配属となりました。

その後は北陸地方建設局の管内ダム、河川、道路、等の事務所を転々として、公共事業用地取得のため業務をさせていただきました。

中でも特に印象に残っているのは、山形県小国町に建設した、横川ダムの補償基準の発表から妥結調印まで当時用地課長として業務に携わったことでした。38 戸の水没家屋がありましたが地権者等の絶大な協力によりまして事業用地を取得することができ、工事も無事完成して、その事業効果を如何なく発揮していることが自分自身でも現地に行き確認ができたことです。

最後に、ここに改めまして、今までお世話になりました各事業箇所の地権者の皆様へ深く感謝申し上げる次第です。

誠に絶大なる御協力ありがとうございました。

「羽越水害50年記念事業(荒川水系)」を開催します。

50年記念シンポジウム

8月26日(土)13:20~16:30(12:30開場)
村上市民ふれあいセンター 大ホール

■**フォトコンテスト及び絵画コンクールの入賞作品の表彰**
今年5月までの期間に募集した、川に関連する写真、絵画の優秀作品を表彰。

■**基調講演**

演題「**特別警報と気象災害への備え**」

講師：気象予報士 天達 武史氏



■**パネルディスカッション**

テーマ「**羽越水害の経験に学び、これからの防災を共に考える**」

羽越水害の体験者や防災関係者に、当時の災害の状況や暮らしへの影響その後の防災・減災の取り組みを語っていただくと共に、今後の防災・減災の方策を議論していただく予定です。

■**未来を担う世代の宣言**

地元小学生から防災に関する日頃の心がけなどを発表していただきます。

同時開催 (10:00~17:00)

- 物産展、防災用品展示販売
- 羽越水害パネル展示
- 災害対策車両展示
- 災害体験コーナー(地震体験車、土石流模型実験)
- 防災楽習迷路



語り継ぎ! 羽越水害 子に孫に

羽越水害から50年

巡回パネル展

8月まで、関川村役場、村上市神林支所・同荒川支所などで展示します。詳細な日程はお問い合わせください。

あらかわ治水巡り

7月29日(土)上流域コース(山形県方面)
8月 5日(土)下流域コース(新潟県方面)
治水にまつわる史跡を巡り、治水に関する歴史・文化に理解を深め、洪水に対する防災意識の高揚を図ります。

お問合せ
羽越水害50年記念事業(荒川水系)実行委員会事務局
北陸地方整備局 羽越河川国道事務所 調査課
【電話】0254-62-6038 【FAX】0254-62-1411

伝言板

(一社)北陸地域づくり協会が主催、共催、後援等で行う一般参加型事業です。
お時間をみつけ、ぜひお立寄りください。

イベント名	期 日	開催地・会場	内 容	問合せ先
高瀬渓谷フェスティバル 2017	7月15日(土)	長野県大町市 大町ダム周辺	ダム内部見学会、 龍神湖巡視体験等	大町ダム管理所 TEL:0261-22-4511
おいしいダム湖畔まつり	7月29日(土)	新潟県関川村 大石ダム湖畔県民休養地	大石ダム見学、 ウォーキングラリー等	大石ダム管理支所 TEL:0254-64-2251
しゃくなげ湖まつり	7月30日(日)	新潟県南魚沼市 三国川ダム周辺	ダム操作室見学、監査廊見学会、 巡視船乗船会等	しゃくなげ湖畔開発公社 TEL:025-774-2200
第16回 社会資本整備 セミナー	7月11日(火) 13:00~15:30	長野市 長野バスターミナル会館	講演①「最近の国土交通行政の 取り組みについて」 講師/北陸地方整備局 担当官 講演②「北陸地域における水害と その対応」 講師/(一社)建設コンサルタンツ 協会 北陸支部 河川及び 砂防委員会 委員	北陸地域づくり協会 技術部 (社会資本整備 セミナー事務局) TEL:025-381-1882 FAX:025-383-1470 締切:7月5日(水)
	7月12日(水) 13:30~16:00	新潟市中央区 新潟県自治会館		
	7月20日(木) 9:30~12:00	富山市 ボルファートとやま		
	7月21日(金) 9:30~12:00	金沢市 石川県地場産 業振興センター		
ほくりく防災・ 減災講座 2017	7月31日(月) 15:00~17:15	新潟市中央区 アートホテル新潟駅前	講演①「大規模災害時における 警察の取り組み」 講師/渡邊 幸治 氏 新潟県警察本部 警備部警備第二課 災害対策管理官 講演②「近現代新潟県における 災害の記憶と記録」 講師/中村 元 氏 新潟大学 人文社会・教育科学系 准教授	北陸地域づくり協会 企画部 (北陸地方防災 エキスパート事務局) TEL:025-381-1160 FAX:025-383-1205 締切:7月21日(金)
若郷湖さわやかフェスティバル 2017	8月5日(土)	福島県会津若松市 大川ダム湖周辺	ダム・発電所見学スタンプラリー、 ダム湖巡視体験等	大川ダム管理支所 TEL:0242-92-2839
白い森おぐに湖 体験	8月6日(日)	山形県小国町 横川ダム周辺	横川ダム・発電所見学、 カヌー体験、木エクラフト体験等	横川ダム管理支所 TEL:0238-65-2363
第35回 小松市民レガッタ	8月6日(日)	小松市 梯川丸内地区	ボート競技会	小松市ボート協会 村井 TEL:090-4325-1542
第15回 萬代橋誕生祭	8月19日(土)	新潟市中央区 萬代橋周辺	水辺のカフェ、コンサートなど予定	中央区役所 建設課 TEL:025-223-7410
羽越水害50年 記念シンポジウム	8月26日(土)	村上市 村上市民ふれ あいセンター	フォトコンテスト及び絵画コンクール入賞作品 表彰・基調講演・パネルディスカッション等	羽越河川国道事務所 TEL:0254-62-6038
阿賀野川 あきはまつり	9月17日(日)	新潟市秋葉区 阿賀野川水辺プラザ	降雨体験、ステージショー、 地元の物販、花火など予定	秋葉区役所 建設課 TEL:0250-25-5690

編集後記

今号も、地域にある食、景観、歴史などの資源を活かし地域づくりに取り組んでいる人達からお話を伺った。その中で、数年前に伺った牧之通りに、地元の方との会話を楽しく多くのリポーターが来ていることを知りうれしくなった。

また行きたい、毎週末行きたい、住んでみたいという流れが生まれる鍵は、そこに住む人たちのまちへの誇り、暮らしぶり、そして温かく迎えてくれる気持ちだと思う。輝いている地域には必ずまちへの熱い想いを持った人が住んでいる。(事務局)

地域づくり in ほくりく 第13号

発行 平成29年7月1日
編集 一般社団法人 北陸地域づくり協会
〒950-0197
新潟市江南区亀田工業団地二丁目3番4号
電話 (025) 381-1160
FAX (025) 383-1205
HP: <http://www2.hokurikutei.or.jp>